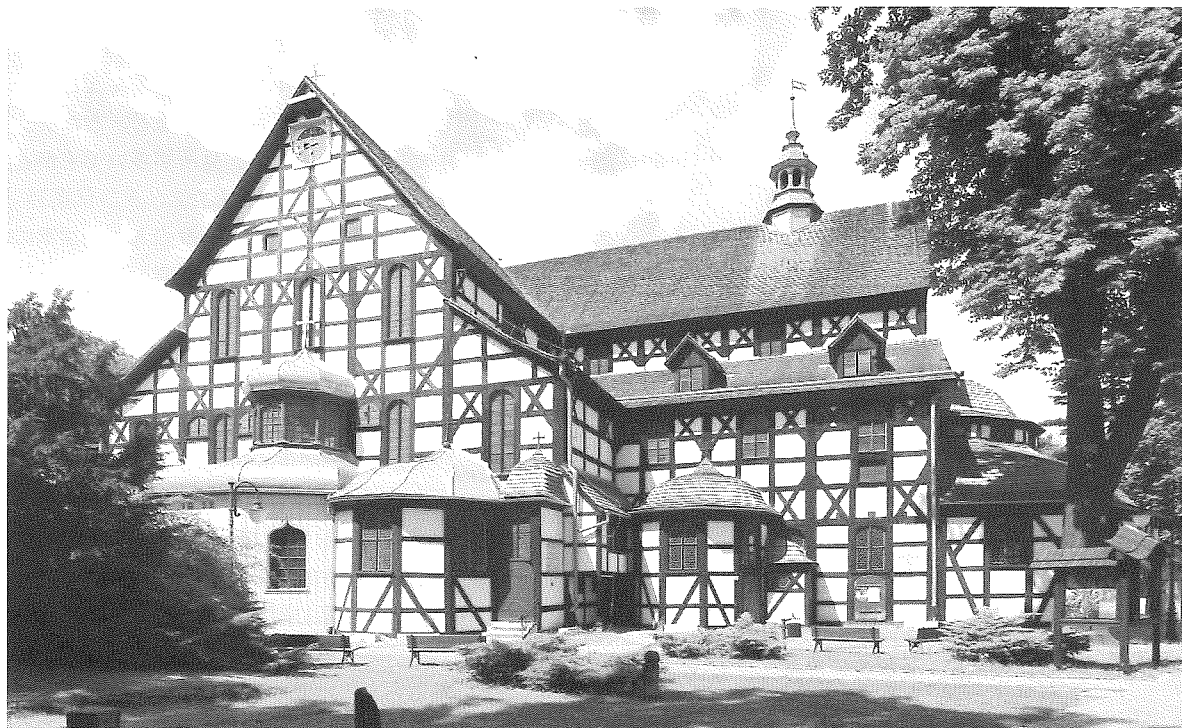


日ポ・サロン会報

日ポ・サロン会報 第17号

発行日 平成29年2月20日
事務局 日ポ・サロン
〒595-0041 泉大津市戎町6-10
TEL.0725-32-6328
FAX.0725-31-3747
E-mail: donkawai@pearl.ocn.ne.jp



ヤヴォルとシフィドニツアの平和教会群（ワルシャワの世界遺産）

日ポ・サロン招聘留学生について

NPO法人 日ポ・サロン 理事長

高島和子

日ポ・サロンが招聘し来日する留学生の大変上手な日本語にまず驚き、真摯で熱心な勉学への姿勢、真面目で地味な生活態度に目が覚める想いがし、それはどのように培われるのかと思わずにはいられません。

ご多分に漏れず少子化の問題がありますが、ワルシャワ大学日本学科の入学率は数年前に最高時で3.4倍、あまりの人気に日本学科は昼夜の2部制になっています。その狭き門に入学すると、まず2週間で平仮名、カタカナ、その後の1週間毎に25漢字習得の傍ら日本語演習や文法、追試が重なりと転部を勧告される為、学生は帰宅後最低4時間の自宅学習が必要との事。

日本語言語学、日本語演習、近代現代史、哲学宗教、近代文学、古典文学、歌舞伎・能の研究者等、世界的にも有名な著作の多い日本学科教授陣に指導を受け切磋琢磨する学生は、3年生時には文庫本が読めるようになり学部論文を提出して大学院に進み、修士論文テーマを胸に日ポ・サロンの招聘で留学して来ます。

古事記をポーランド語訳して本居宣長と違った新説の解釈で、司馬遼太郎の推挙により設置した大阪府の山片幡桃賞を受賞された故コタンスキ博士も90歳まで教鞭を執られました。現在、ポーランド語日本語大辞典に取り組んでおられる教授方もいらっしゃいます。

強国に挟まれ非情な歴史を持つポーランドですが、日本に憧れ留学し学びたいと切望する学生を交換留学生として招聘出来ているのは、皆様のご支援ご協力の賜物でございます。心からのお礼と共に今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

総会並びに講演会

2016年1月23日(土)

於/KBS「桐の間」

会員44名・留学生3名・委任状:54名提出

<第1部>

1. 2015年度事業報告
2. 会計報告 会計監査
3. 2016年度事業報告
4. 役員紹介
 理事長 高島和子
 理事 河合康子・岸本啓子(事務局)
 澤瀉徹郎(音楽担当)・樋口晴子(書記)
 田中サヨ子(留学生担当)
 吉岡久代・牧孝仁(会計)
 長岡正(会計監査) 常田じゅん子(新理事)
5. 新入会員紹介
 荒木・石川・大社・大和田・河合・隈本
 野村・埴淵・濱本・楨得・村島・松下夫妻
 三宅夫妻・山村(アイウエオ順/敬称略)
5. 新招聘留学生
 アグニエシカ・クライニスカ・ベアタさん
 紹介及びスピーチ

<第2部>

1. 講演会 村島章恵 「ラジオ深夜便を担当して」
 (NHKラジオセンター・ラジオ深夜便ディレクター)



講師 村島章恵氏(中央)

日ポ・サロン入会動機

新入会員 大和田 隆

まず、ポーランドと私の関係を述べなければならないと思います。

1976年(今から丁度40年前)、夏の2ヶ月間、イアエステ(注1)プログラムによりポーランドの研究所(注2)で研修を行いました。当時は東西冷戦の真っ最中で「鉄のカーテン」の向こう側へ行くにはかなりの勇気が要りました。しかし、百聞は一見にしかずという諺もあり、また兵隊で中

国へ行っていた父の一度は大陸を見ておく方が良いというすすめもあり、決断しました。

実際ポーランドに行って、人懐っこい性格の国民性に助けられ、イアエステ現地世話役、ヨーロッパ各国からクラクフ内病院、企業などへの研修生同士の交流などがあり、有意義な日々を過ごしました。サマータイム採用期間中でもあり、研究所での研修後、日光浴を兼ねた昼休み中のバレーボールは週2回程度、宿舎での研修生同士(最多20名)のウォッカパーティは週1回、週末の遠足は不定期に行っておりまし

た。遠足は、ザコパネ山中の川下り、オシュビエンチム強制収用所、ピレチカ岩塩採掘所見学など、古都クラクフ市内も古城、中世市場跡、教会等、見所が多いですが近隣名所はほとんど連れて行ってもらいました。

日本人の私に対して、なぜ一般の人々も非常に親切にしてくれるのかは当時はわかりませんでした。ポーランドの宿敵ロシアを日露戦争で破ったからか? 遠い極東から来た日本人(外観で)が珍しいからか? くらいにしか思い浮かびませんでした。

帰国後20年過ぎ、阪神淡路大震災の後、被災少年少女をポーランドが慰労のため招待したという報道、それは大正時代に日本赤十字・陸軍が中心となりシベリアのポーランド孤児救出作戦の『恩返し』であるのを知り、先人の行為及び恩返しに涙が出て仕方ありませんでした。

ポーランド人が私に親切であった理由がこれで判明しました。先人に感謝すると共に、ポーランド国内では救出作戦のことが戦争をまたいでも広く確実に言い伝えられていたのです。

人と人の憎しみの連鎖は国と国との憎しみに発展し行き着く先は戦争です。しかし相手を思いやる行為は、恩返しの往復が続き人と人、国と国の相互理解へつながります。私がポーランドで受けた恩義を少しでも草の根国際交流に役立てたのが日ポ・サロン入会の動機です。

最後に日ポの関係を端的に表してある本、映画を1点ずつ紹介します。

本『世界はこれほど日本が好き』2015年11月、祥伝社、河添恵子著。

日ポの歴史的つながり、ポーランドの親日度合いを詳しくわかりやすく記述。

映画『杉原千畝』2015年12月

命のビザ発行でユダヤ人を救った話で有名。

リトアニアの日本領事館領事 杉原千畝さんの話ですが、映画の撮影はほとんど隣国の映画大国ポーランドで実施。有名なポーランド俳優が多数出演。日本の映画にポーランド俳優が出演するという日ポ文化交流の新しい形。

(注1) 理系の学生の為の海外インターンシップ
仲介機構(ユネスコ等より援助)

(注2) ポーランド科学アカデミー 金属材料研究所
(在クラクフ)



イロナ・マチェイフスカさんのスピーチ

「春の遠足・ダックツアー」

2016年4月6日(水)
会員32名 留学生4名



「大阪ダックツアー」

大原 邦子

梅がほころび春本番が待たれる頃という書き出しで、日ポ・サロンからのお便りが舞い込んだ。

ミシュラン★のレストランの昼食も勿論の大魅力ながら、水陸両用観光バスでの大川の遊覧という文面に目が釘づけになった。毎年親睦会の素晴らしい企画を会報で読み楽しませてもらっているが参加出来ずにいたのだ。水陸両用バスってなんだろう？ 道を走るバスがどうやって川に浮かぶのだろうか？ 頭の中で想像しても考えつかない…

楽しみにしつつ迎えた4月6日。またとない晴天、美味しいお洒落なフレンチ昼食の後、乗り場の川の駅、八軒家。そこで待っていたのは色彩鮮やかに大きくOSAKAダックツアーと胴体に横書きされた天蓋付き窓ガラス無しのバス！

(そう言えばレインコート持参と注意が案内にあったなと頭に過る。) 集合写真後いよいよ出発、天満橋より川に向かって走り始める派手な車体に歩行者が不思議そうな目を向けるのを尻目にバスは得意顔で街中を走る。大阪の笑いを振りまきながら女性のガイドさん、吉本からの出張か？と思わせる話芸で、次々と大阪の歴史や商都大阪、水都大阪の町名や人物の由来など面白おかしく案内してくれる。そうこうするうち、あっという間に大川へバスはドボン！

おっと、その前に川の手前で運転手が交代するという。車から船になるのだからそこはしっかり船舶の操縦者が乗り込んで、1, 2, 3と滑り台みたいところをドボン！

船となってゆったり川を下り上り、水音と船のエンジン音、春の心地良い風と兩岸に見渡す限りのそれもこの日の為とばかりの満開の桜・桜・桜、ああ美しい！数日前にはこの川と空の間には何も無かった景色だったろうにと想像して自然の偉大さに心打たれる。それにしてもこんな風にバスが川に浮かぶバスになるなんて！誰が考えたのか？不思議が解けたもののちょっと狐につままれたような気がしないでもない。しかし当初の不可解さが感激に変わった瞬間でもあった。

広い空と480本もの満開の桜と流れる川。昼食時にご紹介のあった留学生の方たちの流暢で正確な日本語、日本の事柄に対する深い知識やなみなならぬ勉強努力。感服と驚きの連続であった今日の一日は忘れられないものとなった。

このような心おどる一日を企画して下さった方々に深く感謝申し上げます。

アグニエシカさん送別会

2016年8月8日(月)
於/関西文化サロン
会員36名・留学生2名・
お客様1名



「留学を終える頃の感想」

クライニスカ・アグニエシカ
(神戸大学国際文化学研究所)

こんにちは。ご存知かもしれませんが、クライニスカ・アグニエシカと申します。ポーランドでワルシャワ大学の日本学科の修士課程の1年生です。日本語学科ではなく、日本学科に勉強しますので、日本語だけでなく、日本の歴史、文化、宗教についても学びます。去年の10月から日ポ・サロンのおかげで1年間神戸大学の国際文化学研究所で留学することができました。今回、留学がそろそろ終わる頃、私の感想などについて発表させていただきますと思います。

なんといってもこの1年間は私の人生で一番楽しい年の一つです。来日する前にとっても緊張しました。なぜなら初めて1年間という長い間に外国に住んでいるようになったからです。しかし日本学科の学生なので、緊張だけでなく、期待も両方感じました。1年間はなんといっても長い間なので、今まで勉強したことをいろいろ体験できるように素晴らしい機会になりますねと思いました。来日するが早いか、日ポ・サロンの方々から歓待を受けました。時間とともに「やっぱり一人ではないな」と思っていましたので安心しました。この感情をととてもあり

がたいです。

1月の発表した時から様々な経験ができました。冬を満喫できるようにと神戸大学の学生と一緒に長野県にスキーをしに行きました。ポーランドにも山がありますが実家はポーランドの北のほうにありますので、今までスキーをしたことはありません。その旅行はすごかったです。スキーをやったことはなかったなので、初めてとても怖くて、ただ倒れないように集中しました。でもちょっと練習したあとスキーに慣れましたので、恐怖を感じる以外で楽しむようになりました。前に言った通り、冬の時ポーランドでも山の方に行ったことはないで、初めて冬の山景色をみました。神戸に住んでいるので毎日海と山の景色を楽しむのは確かにとても楽で、珍しいと一般的にあまり見えない景色かもしれませんが、長野で見た雪をかぶった山々は忘れない思い出の一つだと思います。

3月といえば、ひな祭りですね。私は寮に住んでいますので、普通にひな人形を見る機会がありませんと思います。しかしこの間、日ポ・サロンからお誘いをもらって、芦屋川のすごなおひな様を見るようになりました。その日はまず有名なフランク・ライトの重要文化財の建築を見学致しました。このような建築を初めて見ましたので、すごく面白かったです。「このような家に住んでいればよかったなあ」と思うほどこの家は気に入りました。フランク・ライトの建築の中に展示してあったのは旧家のおひな様でした。そこで見たおひな様と有馬にあるホテルで見学したおひな様は両方興味深かったです。人形の作り方はとても細かくて美しいだと思います。

この1年間の時、もちろん大阪と京都に何回も行きました。二つの町には忘れられないのは花見の時です。京都で同志社大学に留学する友達と一緒に哲学の道にお花見をいたしました。大阪では日ポ・サロンの方々と一緒においしいお食事をいただいて、水陸両用バスに乗って、大阪の川の中からお花見いたしました。すっかり川の中からツアーが始まると思っていたのですが、まずは陸上での大阪観光から始まりました。大阪歴史博物館、大阪府庁、大阪城、大阪市公館といった名所・旧跡などの横を通り抜けました。日頃馴染み深い大阪市内ですがガイドさんによる案内を聞きながら観光すると新たな発見があり、思いのほか楽しむことができました。観光案内でもしっかり笑いを取るところなどは、さすが大阪のガイドさんです。バスとも船とも言えない独特の外観をしていることもあって乗っているとかなり目立ちます。交差点で止まっていると、歩行者のみなさんからの好奇心に満ちた視線を感じました。大阪でお花見というと造幣局の通り抜けが有名ですが、大川沿いにもたくさんの桜の木が植えられています。花見をどこでもしても、桜が確かにきれいに見えますが、その日に初めて新しい立場からお花見ができました。どこでもあまりできない経験だったので、この日をきっと忘れないと思います。

他の絶対忘れない経験だと「曲水の宴」です。曲水の宴について今回初めて聞きました。しかし少し調べた上



に、とても興味深い行事だとわかりました。日本学科では日本の歴史、文化、文学について学ぶのは当然に面白いですが、この行事では自分の知識を実用に出ることができました。曲水の宴の時、流れてくる盃が自分の前を通り過ぎるまでに即興で詩歌を詠みます。その詩歌を筆で認めて盃の酒を飲んで次へ流すという雅なものです。今度、酒の代わりにお茶をいただきました。

曲水の宴は平安時代の貴族の間で流行したという、優雅な歌遊びです。歌遊びなので参加者のみなは和歌（例えば短歌とか俳句）を書かなければなりません。私は詩を書くことに経験は全くありませんので、日本語で詩を書くのはチャレンジになりました。最後の最後に俳句にして、こういう風な歌を書きました。

「春頃の、ケシの思いで、なつかしみ」

私にとって曲水の宴の準備は非常に楽しかったです。楽しかったし、思ったより長かったです。しかし、時間がそんなにたったと全然感じませんでした。平安時代の歌遊びなので、平安時代の衣裳、ちなみに十二単衣を着るようになりました。日本風の化粧、かつらとこのような着物のタイプを初めて見ました。

準備は数時間かかって、終わりの方ではお姫さんのように感じました。準備の後、ほかの参加者と綺麗な植物園の方に行きました。快晴の日でしたので自然と咲いている桜を扱うことができました。到着した後、植物園にある川のそばに座って、皆は作った歌を書きました。ちょっと緊張しましたが、その一日はとても楽しかったです。日本ではこのような経験ができるのを思いませんでしたので、曲水の宴に参加できて、とても感謝しております。美しい思い出がいっぱいで、とてもうれしく思っております。

しかしその留学の間は遊びだけでなく、勉強もたくさんありました。大学で主に日本語の上級の授業を取って日本語の腕が上がるように頑張りました。実は7月の初めに日本語能力試験のN1を受けました。結果はまだありませんので緊張しています。それから卒業論文のためにいろいろ勉強しました。本とか記事を読んだりしましたので、ポーランドに帰って、卒業論文を絶対書けると思います。そのために一番助かったのは私が参加いたしました哲学と芸術について研究されていた先生の研究会

です。その研究会がとても興味深かったので、ノートをいっぱい取りました。研究会のおかげでいろいろな問題に新しい次元を持つようになりました。それだけでなく論文のための書類を集めました。日本語の仏教とニーチェにかかわる本と、ポーランドで見つけたが買えなかった英語での本を日本で買えたので、とてもうれしく思っております。とりあえず本を6冊買うようになりました。これと、研究会でとったメモを使って、きつといい論文を書けるようになりました。

日本の文化と歴史の理解を深める経験といえば、5月のゴールデンウィークの時です。なぜならその間長崎と広島の方に初めての一人旅に行きました。。最初は広島でした。広島に到着したのはかなり遅かったので博物館とかに行く時間がありませんでしたので、縮景園（しゅっけいえん）に行きました。次の日に広島ではまず原爆ドームを見て、平和記念公園に行き、その後資料館を見学しました。ゴールデンウィークの頃でしたので観光客はもちろん多かったです。それなのに自分のペースでゆっくり見学できました。平和記念資料館に見た展示が忘れかねますことでした。まず、原爆ドームを初めて生で見て、何かよくわからない畏怖、悲しさ寂しさ、色んな感情が混ざったようなものを感じました。ここで一瞬にして数多くの人が亡くなったとは考えられないくらいにゆったりとした時間が流れていました。原爆ドームのすぐそばには川が流れています。原爆が投下された直後は、みんな熱くて水を求めて多くの人がその川に入り、亡くなったそうです。そんな川を見ていると、当たり前ですが今はとても静かに流れていました。しかし、よく考えると広島に原爆が投下されたのは67年前。そんなに大昔のことでもないのです。次に資料館に入りました。資料館には、広島の歩みと、なぜ広島に原爆が投下されることになったかの歴史などがともに説明されていました。また、原爆の恐ろしさを物語る被爆者の遺品の数々もありました。中には目を覆いたくなるような写真もたくさんありました。その中で私が一番印象に残っているのは、「滋くんの弁当」と題された真っ黒なお弁当箱でした。数々の遺品を見て、本当に胸が張り裂けそうになりました。もしも自分の大切な家族や友人が原爆で亡くなってしまったら・・・と考えるだけでも怖くなりました。平和は何にも代えがたいものだなと改めて思いました。私にとって広島には留学生だけでなく、人間として人生に一回行くべきです。

広島最後の日に宮島に行きました。人は多かったのにとても楽しい一日でした。宮島と言ったら世界遺産の厳島神社は外せませんが、島内には厳島神社以外にも見所はたくさんあります。厳島神社を後にして、その他の島内の神社、仏閣を見学します。島内は自然豊かでウォーキングやハイキングなどを楽める場所がたくさんあります。

広島から帰って長崎へ行きました。ゲストハウスに泊まって、そこに泊まっている人と話し合ったりして、いろいろなお勧めところについて聞きました。私は長崎の



チャイナタウンの近くに泊まったので、どこでも行ってもあまり遠くありませんでした。広島と同じく、もちろん原爆資料館と平和公園に行きました。そのほかには出島、メガネ橋、稲佐山などに行きました。しかし長崎で全部見たものの中で一番印象に残ったのは一本柱鳥居です。現在は被爆建造物に指定されているので悲惨な歴史を後世に伝えるべく大切に保存されています。珍しい鳥居なことには間違いはないけど、こういうのは気分がどんよりとなります。

7月には祇園祭と天神祭を見に行きました。祇園祭は人が多かったが、前にこのような大きな祭りを体験できなかったのも、とても楽しかったです。天神祭は夢のようでした。その日に見た花火をけっして忘れられないと思います。両方がとても面白くて、日本の夏を満喫できましたと感じます。

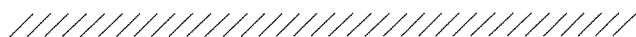
その素晴らしい一年間で得られた経験は全部日ボ・サロンの支援のおかげです。この一年間は人生で一番楽な年でしたと思います。日ボ・サロンでなければ神戸で留学ができなかったと思います。論文の資料を集めたり、いろいろな旅行をしたり、日本の文化の理解を広げたりして、素晴らしい一年間になりました。心から感謝しております。日ボ・サロンの方々のやさしさと受けた支援を決して忘れられないです。

皆様のご支援の活動や温かい励ましのお言葉、皆様のお心が私どもにとって大変心強く、感じ入りました。まことありがとうございました。

(原文のまま掲載)



留学生アグニエシカさんに抹茶を贈呈



「私の大きな夢が叶いました」

トゥルスカ・ドブロミワ



皆さん、こんにちは。

私はトゥルスカ・ドブロミワと申します。ワルシャワ大学の日本学科の修士課程の1年生です。

2016年の10月に来日し日ポ・サロン招聘留学生として神戸大学の国際文化学研究科に所属しております。私は

はシロンスク県のカトヴィツェの近くのクヌルフという街で生まれましたが、3歳の時からずっとワルシャワに住んでおり、ワルシャワを自分の出身地に思います。

私は今までの日ポ・サロンの留学生と違い、最初はワルシャワ大学で応用言語学を専攻し、ポーランド語、ドイツ語と英語の翻訳を学びました。日本語が一番好きな言葉でしたが、ポーランドには日本語を活かせる仕事が少ないので、大学でドイツ語と英語を学ぶことにしました。応用言語学科の修士課程の1年生の時、日本学科の学士課程無しで日本学科の大学院の入学試験を受けることにしました。そのために、夏休みの時、独学で漢字や文法を覚え、2015年10月に入学試験に合格し、日本学科の学生となりました。それから同時に2つの大学院に入りながら、多くの授業を受け、日本語の勉強はもちろんのこと、応用言語学科の修士論文をも頑張りました。

私は中学3年生の時、日本語に興味を持ち、夏休みを利用しインテンシブコースに参加しました。その時から日本語に夢中になり、高校、学生時代のそれぞれ2年間にわたって日本語学校に通っていました。それ以外の間は、日本語を独学で勉強していました。日本語の上達のために高校2年生から現在まで毎年一年中お金を貯め、7回も来日できました。

私は日本語をきっかけに日本にも関心を持ちましたが、よく考えると、日本について様々なことを教えてくれたのはお母さんです。お母さんはよく本を買ってくれたり映画館に連れて行ってくれたりして、彼女のおかげで宮崎駿の作品などを知りました。

去年の10月に来日してから、日本でしかできないことをしてみたいと思い、ちょっと珍しいことに挑戦しました。

例えば、去年の大晦日の前に黒門市場でふぐ屋さんで手伝わせてもらいました。その日は、魚市場に来た時、その賑やかさに驚き、最初は大人しい私には魚市場では働けないと思っていましたが、諦めずにやってみることにしました。やってみたら、そのアルバイトの楽しさが分かり、8時間もお客さんを呼び込んだり、ふぐやカニを売ったりしていました。適切な服を持っていませんでしたが、靴やズボンがびしょびしょ濡れながら閉店の前の大掃除まで一生懸命に頑張りました。

その上、東洋拳法のサークルに入部しました。そこで日本人の先輩や監督に様々な技を教えてもらい、楽しい雰囲気の中でいい時間が過ごせましたので、他の留学生にサークルの楽しさを伝えました。そうすると、部員の7人しか居ないサークルに4人の留学生を勧誘することができ、サークルは国際的な雰囲気になりました。その時から、様々な国の留学生と交流しながら、日本人の学生と留学生はお互いにコミュニケーションが取れるように通訳したりしています。

神戸大学では、様々な日本語の授業を受け、上達のために会話、作文、聴解、漢字、語彙や日本語能力試験の対策の授業を受けています。来日中、日本語能力試験N1を受ける目標を決めていましたが留学のおかげで思っていたより早くつまり去年の12月に受験できました。さらに辛島先生の「日本学演習」という授業を通して、日本全国や京阪神の文化や歴史などを勉強しています。それから、その授業で阪神、阪急、サントリーといった企業の歴史、歌舞伎や戦後の日本文化等を学んでいます。卒業論文は、メラノヴィッチ・ミコワイ先生の下で書きます。メラノヴィッチ先生は、芥川龍之介、安部公房、川端康成、谷崎潤一郎、夏目漱石、大江健三郎、太宰治といった日本の小説家の作品をポーランド語に訳した先生であり、文学の翻訳の大家です。メラノヴィッチ先生みたいな優秀な教授に出会えたことを大事にしたいなので、卒業論文を是非に頑張りたいと思います。

卒業論文は、大阪出身の開高健について書きます。開高健は、1930年に大阪市天王寺区で生まれました。開高健は長い間大阪市に住んでおり、大阪市立大学法文学部法学科を卒業しました。卒業後は、1954年に大阪市北区に本社を置く、洋酒を造る寿屋（ことぶきや）に就職しました。寿屋は、サントリー株式会社に商号変更し、重要な会社であり続けています。開高健は、「人間らしくやりたいナ」というウイスキーのキャッチコピーのおかげで有名になりました。開高健はその時代に小説家としても活躍し始め、1958年に『裸の王様』で芥川賞を受賞しました。

私は、卒業論文の一部として、開高健の『裸の王様』と『パニック』という作品をポーランド語に訳さなければなりません。翻訳してから『裸の王様』、『パニック』『日本三文オペラ』に描かれた個人と社会の関係を検討します。

開高健の多くの作品は、組織化された戦後社会における個人の重みや組織の働き方を話題にしています。例を挙げると、『日本三文オペラ』は、大阪の旧陸軍工廠の広大な敷地ところがっている残骸を警察の不注意で掘り出し、鉄材として売る泥棒集団「アバッチ族」の人生を描いています。開高健は、そういった社会から追い放たれた人間存在の絶望感、悲しさや寂しさをよく書き表しています。『裸の王様』も、大量繁殖したネズミの大発生を通して、組織の中に置かれた人間とその組織の働き方を描いています。

将来につきましては、私の大きな夢は日本かヨーロッパの日本企業で就職することです。そのために、大学の

グローバルキャリアセミナー、気になる企業のインターンシップ、ジョブフェアや交流会などに顔を出し、日本人と共に様々なグループワークに取り組みました。その経験の影響で日本人みたいに日本社会に積極的に参加することができ、能力的や精神的に成長できました。将来に、日本で習ったことを生かして、仕事上で日本人と上手にコミュニケーションを取りながら仕事がしたいとします。さて、日本の方々によく聞かれる質問ですが、来日してから最も驚いたことは、イノシシの出没です。初めてイノシシに出会ったのは10月に寮から駅への道でイノシシを見かけたときです。その時はドキドキし、襲われる覚悟を決めたのですが、私が見かけたイノシシは可愛く、人間みたいに歩道に沿ってブラブラ歩いていたので、全く怖くありませんでした。その時からイノシシに何度も出会いました。山の中の神社を訪ねた時にも、大学の帰り道でも、夜景を見に行った時にもイノシシが出没していました。イノシシは何度も寮を訪ねてきて、イノシシは欠けてはならない山の重要な存在だと思いました。

それから、去年の10月から日本の日常生活や行事などを何度も体験できました。日ポ・サロンのの方々のおかげで紅葉の時期に山に囲まれた、景色の美しい村で人形浄瑠璃芝居を楽しみ、11月の紅葉狩りの時、榮西禅師が伝えた茶の木がある建仁寺を参拝し、東本願寺の渉成園で紅葉を愛でたりでき、豊かな自然の中で幸せで胸いっぱい素敵な一日を過ごしました。それに、日ポ・サロンのの方々のおかげでクリスマスに美味しいチキンを、お正月の前にお餅つきに参加させていただき、親睦を深める機会が多くあったと存じます。皆さんに日本文化を体験させていただき、心から感謝しています。

この留学を通して、私の大きな夢が叶いましたし、素晴らしい方々に出会えたので、残っている日々を大切にしながらこれからももっともっと頑張っていきたいと存じます。皆さん、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。ご清聴ありがとうございました。(原文のまま掲載)

大嶺未来オールショパンピアノリサイタル ショパンの音魂を極める

2016年10月2日(日)14:00開演

あいおいニッセイ同和損保

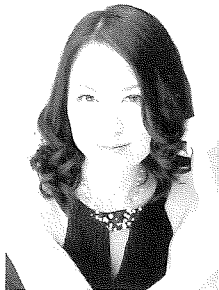
ザ・フェニックスホール

〒530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 TEL.06-6363-7999
(梅田新道・東南角 ニッセイ同和損保フェニックスタワー内)

§ オール・ショパン・プログラム §

- ・ 4つのマズルカ Op.68
 - Op.68-1 ハ長調
 - Op.68-2 イ短調
 - Op.68-3 ヘ長調
 - Op.68-4 ヘ短調

- ・ ワルツ ヘ長調「華麗なる円舞曲」Op.34-3
- ・ ポロネーズ 第1番 嬰ハ短調 Op.26-1
- ・ ポロネーズ 第2番 変ホ短調 Op.26-2
- ・ ポロネーズ 第5番 嬰ヘ短調 Op.44
- ・ 24の前奏曲 Op.28



御礼ごあいさつ

大嶺 未来

今回のリサイタルでは、大変お世話になりました。

日ポ・サロンの皆様には多大なるご協力、ご尽力を頂き心より感謝申し上げます。

ほぼ満席の会場での演奏も、人生における素敵な経験となりました。新留学生ともお話が出来、日ポ・サロン様らの素晴らしい活動には頭が上がりません。

沖縄からの母と伯母、知人友人、遠路岡山からの門下生徒も大変喜んでくれて良かったです。

色々のご協力誠に有難うございました。

2013年から取り組んで来ました「ラフマニノフ全曲演奏シリーズ」(全6回)が終了し、秋には念願のファーストCDをリリースし、レコード芸術・特選盤に選ばれ、努力の実りを感じる2016年でした。

ラフマニノフがロシアを去る最後の作品群であり、ラフマニノフらしさが最も表れている音楽だと感じます。

私にとっても思い出深い作品をCDに収められた事は感慨深いこととなりました。

今後とも努力、精進して参ります。温かいご支援を心からお願い致します。



大嶺未来さんのピアノリサイタル・サイン会

「私とポーランド」

大嶺 未来

昨年の10月は、日ポ・サロン様にショパンリサイタルを開催していただき、心より御礼を申し上げます。

大阪でたくさんのお客様に囲まれてショパンを演奏できたことは、人生においても素敵な思い出となりました。これもポーランドが繋いでくれたご縁だと思います。少しばかり私とポーランドのお話をさせてください。

私がポーランドに初めて訪れたのは、1998年高校1年生の春休みでした。「若い音楽家のためのルービンシュタイン国際コンクール」に出場するためです。デパートで毛皮のコートと夏用の半袖Tシャツが並んで売っていたり露店のハンバーガーの野菜が白菜だったり、衝撃的なことばかりでした。ただ、灰色の空と古い街並み、公園が美しくショパンの作品を違う気持ちで弾けるようになったのを覚えています。その時のコンクールは予選落ちで、2年後の2000年に再度チャレンジして優勝することができました。

た。この優勝こそが、私の人生を変えたと言っても過言ではありません。2000年の秋には優勝の褒賞として、ヴロツワフ、パデレフスキ生家、ベルギーでのリサイタルが組まれました。さらに2001年春にはワルシャワに滞在してヤシンスキ先生のレッスンを受けることになり、ポーランド人の家庭でホームステイをしました。ポーランドへの留学の気持ちが高まり、2001年8月にパレチニ先生に「生徒にしていだけないか」とMDを送ってみました。パレチニ先生から承諾のお返事があったので、東京芸大の休学手続きをとり、ポーランドへ引越す準備を始めました。ワルシャワ音楽院の入試とポーランドの引越しまで、わずか1ヶ月しかなかったので、ポーランド語は全くわからないままの渡航となりました。

入試は無事に終わりましたが、それからが大変でした。まず、引越し先でピアノ練習の苦情が来しました。以前ピアニストが住んでいたところだったのですが……。日本語が話せる不動産を紹介していただき、とにかくピアノが練習できるところ、ということで引越した先は、ワルシャワ南郊外のジャウカ (Działka) の中にある一軒家でした。周りに建物はほとんどなく庭は家の2倍ほどありました。留学してすぐに冬が来ましたが、雪かきが大変だったばかりでなく、金属の門が凍って、鍵がさせなくなったこともありました。暖房代がものすごく高いので、キッチン暖房を切って天然の冷凍室にしました。ワルシャワ音楽院では、レッスンこそ英語だったものの、授業はポーランド語でした。週に2回ワルシャワ大学に通いポーランド語の授業を受けました。家でも練習以外はポーランド語の勉強をしましたが、2年間話すことができませんでした。周りに怒られ始めて悩みましたが、3年目になって、急にポーランド語がわかるようになりました。そこからは試験も卒試論文もポーランド語で書きました。

学校にも慣れ、国際コンクールで賞を受賞するようになり、順風満帆かと思った矢先、家の近所で野犬に噛まれる事件がありました。イースターの夜、レッスンの帰りにふくらはぎを噛まれたのです。大家さんの助けで公共の病院に行き、注射を打ちました。その傷跡はいまだに残るほど深いものでした。家の近所で野犬に襲われそうになったことは度々ありましたが、「もう怖くて住めない」と思い、再度引越す決意をします。ワルシャワの最後の住まいとなった場所は、靴職人宅の2階部分で、1階には90歳のおばさんが住んでいました。彼女は独身で、靴職人の大家さんと血縁はありません。頭脳明晰でかわいらしいおばあちゃんは、時々2階にあがってきて昔話を聞かせてくれました。戦争の時にハンブルグまで歩いて逃げたこと、しばらく工場勤めをしてポーランドに戻ってきたことを話してくれました。練習の約束時間は8～21時でしたが、ショパンコンクール前などは

「もっと弾いていいのよ。あなたのショパンを聴いて幸せに思うのよ」と言ってくださいました。ワルシャワを離れる時におばあちゃんは泣いてくれました。私がポーランドを去って2年後にお亡くなりになられたそうですが、最後まで私のことを次の住人になった学生に話してくれたそう

です。

ポーランド留学時代の最大のイベントは、ショパン国際コンクールでした。留学して以降、「出たい」と思っていたコンクールです。私が受けた2005年から現地での予備予選が始まりましたが、新しい取り組みにワルシャワは混乱していました。予備予選では400名近い人が集まった記憶があります。ホテルがない、練習場所がない、滞在費用がない！

色々な問題が続出し、次の2010年には予備予選は春に移動になりました。私は家があるので、落ち着いてコンクールに挑めるかと思いきや、ポーランド語が話せる外国人参加者ということで、テレビインタビュー取材がたくさん入り、困った記憶があります。ショパン国際コンクールは人生最大の緊張をしたコンクールになりました。ただ、日本の恩師が2名も応援に来て下さり、多くの方々に感謝の念を抱いたコンクールでもありました。結果はセミファイナル敗退でしたが、翌日の朝にはポーランドのコンサート事務所からお電話をいただき、ワルシャワ近郊の町でショパン：協奏曲第1番を弦楽四重奏版で演奏するコンサートを幾つかいただくことになりました。ショパンコンクールの約半年後、ワルシャワ音楽院を首席で卒業することができました。

ポーランドに住んだのは、約5年半でした。その間に、ポーランドはEUに加盟する大きな出来事を迎えました。最初に留学した時は、正直住みにくい国だな、と思いました。ビザ取得でも銀行でも、揃えるべき書類を持っていたも、あれがない、これがない、と皆いう事が違って、振り回されることにストレスを感じていました。EUに加盟したことで番号で呼び出すシステムがあちこちに導入され、待たされることがなくなり、フランス系の大型ショッピングセンターができたり、冬でも彩り豊かな野菜が食べられるようになったり、次第に生活が豊かになっていったように思います。2015年にワルシャワを訪れた時も、街のあちこちがさらに近代化されて大都市になっていることに驚きました。ただ同時に寂しく思うのです。あの灰色の景色は、ショパンが生きた時代により近かったように思うし、そういった面を残した国だからこそ、私はこの国に留学したい！と思ったからです。

ただ、ポーランドの5年半はかけがえのないものです。面白い話、苦労話は山のようにありかけがえのない仲間にも出会えました。そして私の音楽性も大きく変わりました。ポーランドで学んだショパンを演奏している、と自信を持って皆様にお聞かせできることは、喜びでもあります。

ポーランドを通じて、日ポ・サロン様に出会えたことにも感謝しています。また皆様と「ポーランドの想い」を共有できたら嬉しく思います。

長文、お読みいただき、ありがとうございました。



「秋の親睦会」

2016年11月30日(水)

建仁寺及び渉成園にて

会員22名 お客様1名 留学生3名

「秋、といえば紅葉狩り」

小松典子

11月30日は、日ポ・サロンの親睦会でした。京都の建仁寺、ぎおん翠雲苑(昼食)、渉成園(東本願寺の別邸)というコースです。すっきり晴れて風もなく寒くもなく、紅葉狩りをもってこいの日でした。

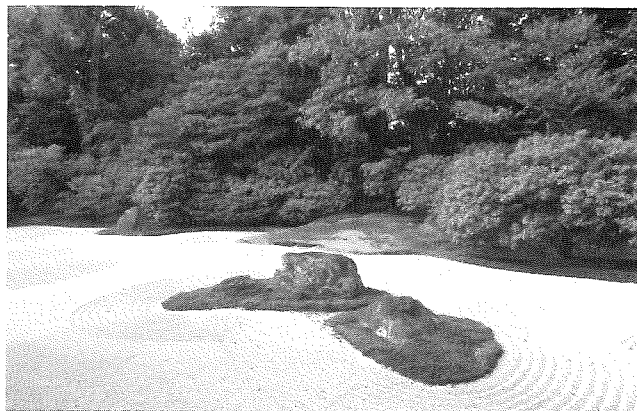
紅葉狩のスタートは建仁寺です。臨済宗の禅寺で、俵屋宗達の「風塵雷神図屏風」があります。この屏風を拝観できることが楽しみでした。又、○△□乃庭という小さな庭があり、どこに○△□があるのか探するのが謎解きのおもしろいでした。座って庭を眺めていると、清々しい気が身体の中を流れて気持ちがよくなります。禅寺にはこの清々しい気が満ちているのでしょう。

さて次は本日のお楽しみ。中華料理の翠雲苑です。建仁寺のすぐ近くにあるのですが、祇園花見小路は人、人、人で溢れかえってなかなか前へ進めません。翠雲苑は花見小路から少し横に入った所にあるのですが、少し入っただけなのに、花見小路を歩く沢山の人が見えているのにとっても静かな佇まいのお店です。翠雲苑は昔の日本家屋をあまり変えずにお店にした様にみえます。家族だけで経営されているそうです。料理もあっさりした味で、とてもおいしく頂きました。又、調味料の食べるラー油が絶品でした。お土産に4個も買ってしまいました。

最後は「渉成園」です。「枳殻邸」とも呼ばれています。枳殻とは「からたち」のことで、からたちを生垣として植えていたそうです。2回ほど来たことがあります。秋は初めてです。銀杏の黄葉があざやかで、今でも目に浮かびます。色々な花が咲く時に来てみたくなります。



今回、京都市内3ヶ所行っただけですが、京都は奥が深い、そして、この奥深さを探りに、又、来たくになります。奥深く、興味津々の京都に連れて来て頂きありがとうございました。



第10回 ワルシャワ大学日本祭について

高島和子

1816年に創設されたワルシャワ大学では、1919年リヒテル・ボグダン教授が少数の学生を対象に初の日本語講座を開設、日本学研究・日本語教育はゼイフリッド・カミル教授、ヤボルスキ・ヤン教授、コタンスキ・ヴィエスワフ教授に受け継がれ、1960年以降は米川和夫講師・工藤幸雄講師・岡崎恒夫講師が日本語教育を躍進させ現在に至っている。1956年には、東洋学部中国学科の副専攻であった日本学科が完全に独立し、他の学科と同等の権利を取得。

2016年10月24～26日に日本学科独立60周年を記念して、「戦争と平和-昭和天皇の日本」をテーマに学会が開かれ、日本学科長コジラ・アグネシカ教授のご招待を受け参加しました。各大学教授方・研究者をはじめ学生は授業として多数参加していました。会員の皆様のご支援ご協力下さっている留学生が学ぶ日本学科が主催する学会の一部をお伝えします。

<10月24日>

- | | |
|-------------|---|
| 10:00～10:30 | 開会式 スタレツカ・カタジナ講師 |
| 10:30～10:50 | パワシュ・ルトコフスカ・エヴァ
「昭和天皇とその時代」 |
| 10:50～11:30 | 梶田明宏(宮内庁)
「昭和天皇実録」はどのような記録か |
| 11:30～12:10 | 原武史(放送大学)
「戦後日本の民主主義と昭和天皇-占領期を中心として」 |
| 昼食 | |
| 13:10～13:50 | 庄司潤一郎(防衛省)
「第二次世界大戦における日本の<終戦>を巡って」 |

13:50～14:30 沼野充義（東京大学）
「20世紀日本の＜戦争と平和＞-
加賀乙彦の『永遠の都』『雲の都』を
読む」

Break

14:30～15:50 セッション：歴史、文化

14:40～15:00 梶田明宏
「絵葉書から見る日本の戦争と社会」

15:20～15:40 楯岡求美（東京大学）
「戦争を＜耐え忍ぶ＞心：秋元松代の
戯曲『常陸坊海尊』を中心に」

15:40～ 質疑応答

Break

16:00～ 「Always三丁目の夕日」鑑賞

<10月25日・26日>

文学、言語学、言語教育、歴史、思想史、宗教学の各セッションや渡辺秀夫（信州大学）、中丸秀夫（防衛大学）プシビルスカ・しのぶ（ワルシャワ大学）、田野尻哲朗（東京大学）、アレクサンドラ・ヤロシュ（コペルニクス大学）、野崎勉（愛知淑徳大学）、クリストフ・ステファンスキ（コペルニクス大学）、カタジナ・スタレツカ（ワルシャワ大学）、君島彩子（国立民族博物館）各教授による講義が行われた。

なお、学会の3日間、11時～17時まで、茶室・懷庵で30分毎の席入りが行われ、茶道体験希望者が続いています。

「WEBの愉しみ」

河合康子

私はスポーツが大好きで、これまで登山やスキー、テニス、ゴルフ等をしてきましたが、加齢と共に体のあちこちに不具合が生じ、激しいスポーツから順々に出来なくなりました。60歳代に娘にパソコンを教してもらい、漸く日ポ・サロンや同窓会の案内状を作ることが出来るようになりました。70歳代、高校の同窓会誌に仕事でパソコンを使っていた人達が定年になり同窓会館でパソコン教室をしておられることが載っていて、もう少し基礎から習いたいとノートパソコンを持参して同窓会館に通い始めました。そのうち、日ポ・サロンのホームページを作りたいとの意欲が湧き、相談したところ「ホームページビルダー」の存在を教えてもらうことになったのが4年ぐらい前でした。まずプロバイダーを決め、次に表紙や内容を決めたりして形が整いましたが、家にあるデスクトップには慣れていても、全く別のソフトに慣れるのは難しく、いまだに先生の助けがないと自分一人では何も出来ません。それでも3年前には会報にホームページのアドレスを出せるようになり日ポ・サロンを宣伝しています。

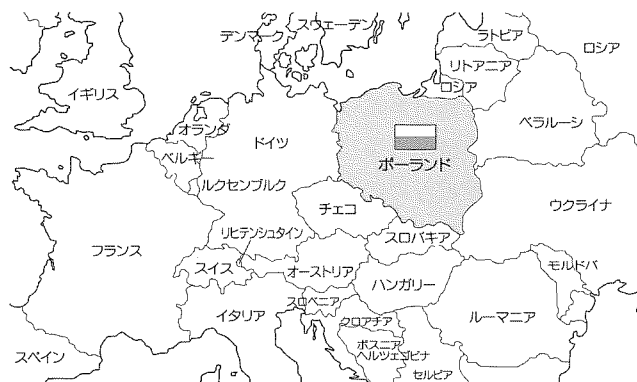
しかし、誰からも感想を聞くこともなく、がっかりしていましたが、2015年のショパンコンクール開催時にポーラ

ンド旅行をした際、クラクフに留学している日本人の園山さんが、日ポ・サロンのホームページを読んでいましてと云ってくださり、又昨年10月、日ポ・サロンの招聘留学生のドブロミワさんにずっとホームページを読んで楽しみにして来ましてと聞き、大変嬉しく思いました。

80歳代、何年パソコンをしていても奥が深く、少しのミスタッチで画面が急に変わったり、色々なトラブルに悩まされている日々、ホームページビルダーを自分で使いこなせる日が来るのかと少々心もとなくもありますが、家で座っていても出来るおもちゃがあり、何歳になっても飽きる事のない仕事があつてよかったとも思うこの頃です。

関西在住日ポ・サロン後援留学生(2016年度)

マルチン・タタルチュク	京都大学文学部大学院現代文学科
アガタ・ヴェルボウスカ	神戸大学経済学部大学院
イロナ・マチエフスカ	神戸大学国際文化学部
アンジェイ・ナワラニ	神戸大学国際文化学部
アグニエシカ・クライニスカ	神戸大学国際文化学部
ドブロミワ・トウルスカ	神戸大学国際文化学部



特定非営利活動法人 日ポ・サロン

<http://nipposalon.org/>

< 編集後記 >

2016年は会員の声掛けに賛同して下さり10名も新入会員をお迎えし会員133名になりました。会員名簿を作成してしまし、お一人おひとりの日ポへのお支えの重みを感じ有り難く励まされます。世界は自国中心主義が台頭してきて不安の中、ポーランドも難民受け入れ拒否などの国策です。留学生からポーランドでは「食事はもう一人のために多く作って、訪問客を受け入れられるようにしている」と愛ある生活について聞いていました。きっと国民には今でも根付いていることなのでしょうが、世の変化を思い胸痛みます。

日頃、留学生からは何時も教えられることばかりで良い刺激をもらっています。若者が遅く育って良いことに向かつて下さるのを願うばかりです。

日ポ会報は皆様との交流の場です。どうぞ思いをお寄せください。

事務局担当 岸本啓子